各水試発トピックス

「余市ムール」始まりました！ ムールガイ養殖研究協議会の設立とこれまでの取り組みについて

ムール貝というと、あまりなじみが無いかもしれませんが、パエリアやパスタなど洋食ではよく使われる貝です。ヨーロッパでは白ワイン蒸しをバケツに入れておつまみ感覚で食べる習慣があるほど人気があります。日本で言うところの枝豆ですね。このムール貝、海外では養殖が盛んに行われているのですが、日本ではホタテやカキ、ホヤの養殖施設にくっついたものを取って出荷されている場合がほとんどです。そこで、北海道初！ムール貝養殖（試験）始めました！

平成28年度から始まった道総研の研究「日本海海域における漁港静穏域二枚貝養殖技術の開発と～以下略」において、余市郡漁業協同組合の漁師さんと一緒に余市港内でムール貝養殖試験を開始しました。この２年間でわかったことは、天然採苗できること、１年間で商品サイズ（５cm）まで成長すること、４月～５月中旬がもっとも身入りが良いこと、です。さらに、私どもの事業に協力してくださるシェフに調理テストをしてもらったところ、「味が良い」「身入りが良い（写真１）」「風味が良い」だけでなく、「味がクリアで美味しい」「モンサンミッシェルにひけを取らない」「購入して使いたい」などなど非常に良い評価をいただきました。

写真１　余市ムールの身入り

このような経緯から、余市町からの提案もあり、ムールガイ養殖研究協議会を設立することになりました。ムールガイ養殖研究協議会は余市郡漁協（漁師さんを含む）、余市町、後志地区水産技術普及指導所、中央水産試験場を構成員としており、その他、町内外のシェフにアドバイザーとして協力してもらっています。

ムールガイ養殖研究協議会を設立してからは漁師さんも漁協さんも大忙しです。まず、新たに養殖桁を設置しました。この養殖桁にムール貝を採苗した養殖ロープもつるして、今年度の養殖を開始しました。「ムール貝を売ろう！」って言ってくれたシェフを訪ねて販売について相談したら、来春には販売することが決定しました。しかも東京…。もちろん、余市町内や近郊の市町村、札幌にも販売する計画です。「やっぱり地元から盛り上げていかないとね！」って漁師さん←かっこいい！じゃあ、どういうふうに出荷するかと余市郡漁協冷凍加工部とも相談。どんどん形になっていきます。ブランド名も決めました。「余市ムール」です！語呂がいいでしょ！この余市ムール、余市町内のレストランへ試験出荷したところ、４週間で36kgも使ってくれました。完売です。お客さんからの評判も良かったと教えてくれました。

まだまだやること決定することいっぱいですが、来春の販売が楽しみです。これからも皆で協力して取り組んでいきます。

（清水洋平　中央水試資源増殖部）

各水試発トピックス

稚内の小学生が「解剖体験」！

平成30年８月１日、稚内水産試験場を市内の小学生が訪れ、水産生物のスケッチや解剖、年齢査定等を体験しました。

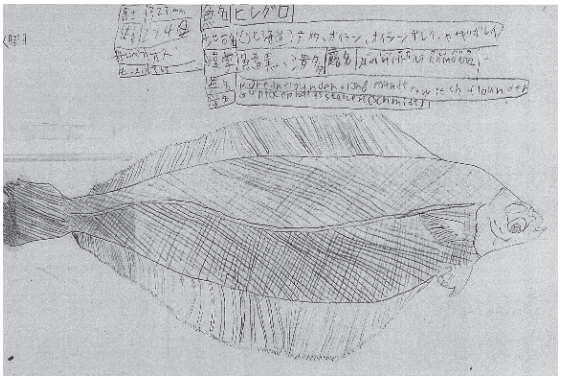
昨年度から、稚内市社会教育センターが主宰する小学生を対象とした体験学習会の一コマを稚内水試が受け持つこととなり、今回は２回目の開催です。参加人数は４名と少ないですが、そこは少数精鋭の個別指導で、皆さん知的好奇心にあふれ、終了時間いっぱいまで存分に学んでいきました。

種名をふせた水産生物（マガレイ、ヒレグロ、ニシン、ホッケ、シマソイ、スルメイカ、ホタテ、ウバガイ）を並べておき、好きな生物を選んでから、特徴をよく見てスケッチしてもらいました。それから、描いた生物の標準和名を図鑑写真から推理してもらいました。これがなかなか難しく、職員がヒントを出しながら正解に誘導しようとするも、写真と現物とでは色合いや鰭の長さなどが異なるため、子供達は簡単には納得しません。我々にとっては見慣れたスルメイカでも、図鑑写真と照らし合わせると確かにアカイカの方が似ていたりして、なんと説明して良いやら。

スケッチの後は、自分達でハサミを使って解剖しました。器官の中で一番目立つのは肝臓、心臓は思ったより小さい、生殖腺はオレンジ色がメス、白いのはオス、だけどスルメイカの場合は雌雄の判別方法は魚と違う、など新発見ばかりだったと思います。そして、職員が摘出した耳石を顕微鏡で観察し、透明帯の数を数えて年齢査定をしてもらいました。最も明瞭に見えたシマソイの耳石の透明帯は「５本」で全員一致。マガレイやニシンも比較的明瞭に見えましたが、ヒレグロ（ナメタ）の耳石は「真っ白にしか見えない～」と難航しました。最後は、子供達お待ちかねの水槽施設の見学に行ってから終了となりました。

同センターの体験学習会はこの冬にも予定されており、さらに来年度からは中学生を対象とした、もう少し高度な体験学習会が組めないかも検討されています。子供達のこんな経験が記憶の片隅に残っていて、いずれ、道総研水産試験場の研究員になりたいと思う気持ちに繋がっていったら嬉しいですね。

（星野　昇　稚内水試調査研究部）



小学４年生によるヒレグロ（ナメタ）のスケッチ
特徴をよく捉えています！

細かい特徴も逃さずスケッチして図鑑で調べる
これかな～？なんか違うな～･･･

各水試発トピックス

第50回日ロ研究交流が開催されました

平成30年６月28日と29日に、中央水産試験場で道総研水産研究本部とサハリン漁業海洋学研究所（サフニロ）との第50回日ロ研究交流会議が開催されました。本交流会議は平成２年（1990年）から相互訪問により継続して開催されています。サフニロからの訪問団はベリカーノフ・アナトーリ所長顧問、ペロフ・アルチョム研究員の２名でした。当初はジャリコワ・ワレンチナ所長も来道予定でしたが、残念ながら急用により直前にキャンセルになってしまいました。一行は６月27日に空路でユジノサハリンスクから新千歳空港に到着し、その日のうちに余市町に移動しました。

翌28日に中央水産試験場のセミナー室で研究発表会が開かれ、ニシン資源や漁業資源の変動、ブリの鮮度保持技術、キュウリウオ科魚類に関する話題など、計８題について発表し合い、活発に議論しました。さらに、事情により休止している共同研究の新たなテーマとして、「北海道中北部とサハリン南西部日本海におけるコンブ群落の特徴と海洋環境との関係解明」が提案され、平成32年度（2020年度）の共同研究再開を目指して議論されました。また、本研究交流が50回目に達したことを記念し、お互いが用意した記念品を交換しました。

29日には、確認書を交わして交流会議を終了した後、一行は北海道水産林務部と道総研本部を表敬訪問しました。道水産林務部では幡宮水産林務部長ほか、水産林務部の幹部職員の方々に対応いただきました。特に幡宮部長は本研究交流の初期に携わられた経験があるため、コンブに関する共同研究への期待や海獣による漁業被害の情報など、双方の水産業に関わる具体的な話題で会談が盛り上がりました。道総研田中理事長との会談では、北海道とサハリンとの距離が近い優位性を活用し、本研究交流をより一層推進することで考えが一致しました。

一行は、30日に空路で離道しました。次回の研究交流は、来年（平成31年）６～７月にユジノサハリンスクで開催されます。道総研水産研究本部は３名の派遣団を結成してこれに参加する予定です。

（髙嶋孝寛　水産研究本部企画調整部）

上：中央水試ロビーで記念撮影、下：サフニロから贈られた記念品（魚皮を使った貼り絵）